

日中韓の地理教科書における記述から見られる教育の特徴

南, 春英 / NAN, Chunying

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

151

(発行年 / Year)

2019-03-24

(学位授与番号 / Degree Number)

32675甲第447号

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2019-03-24

(学位名 / Degree Name)

博士(学術)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021761>

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	南 春英
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 687 号
学位授与の日付	2019 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 伊藤 達也 副査 准教授 小原 文明 副査（学外）成蹊大学教授 小田 宏信

日中韓の地理教科書における記述から見られる教育の特徴

I. はじめに

南春英氏提出の学位申請論文『日中韓の地理教科書における記述から見られる教育の特徴』は、中国と韓国の地理教科書における日本に関する記述の変遷とその特徴を探り、中国と韓国における日本のイメージ、記述の変遷に影響を与える要因を明らかにするとともに、日本の地理教科書から見た中国と台湾の記述を分析することにより、日中韓 3 か国の地理教科書の特徴を明らかにすることを目的としたものである。以下で本論文の構成を示す。

第 I 章 はじめに

第 1 節 研究課題

第 2 節 研究目的

第 3 節 研究対象

第 II 章 日本・中国・韓国の教育制度と教科書制度

第 1 節 日本の教育制度と教科書制度

第 2 節 中国の教育制度と教科書制度

第 3 節 韓国の教育制度と教科書制度

第 4 節 日本・中国・韓国の教育制度と教科書制度の比較

第 III 章 中国の中学校地理教科書における日本の扱い

第 1 節 中国における教育の変遷と中学校の地理教育課程の変遷

第 2 節 中国の中学校地理教科書における日本に関する記述量的変遷

第 3 節 中国中学校地理教科書の日本に関する記述の質的特徴と記述内容の変遷

第IV章 韓国の高校地理教科書における日本の扱い

第1節 韓国における教育の変遷と高校の地理教育課程の変遷

第2節 韓国高校地理教科書の日本記述の量的特徴と記述項目の変化

第3節 韓国高校地理教科書の日本に関する記述の質的特徴と記述内容の変遷

第4節 韓国の地理教科書と大統領

第V章 日本の地理教科書から見た中国と台湾

第1節 日本の地理教育の変遷と高校地理科目の変遷

第2節 日本の高校地理教科書における中国に関する記述の変遷

第3節 日本の高校地理教科書における台湾

第VI章 中韓両国の日本に関する記述の比較分析と日本の教科書の中の中国

第1節 戦争に関する記述

第2節 批判の対象の差

第3節 文化的優越感の有無

第4節 日本の教科書から見られる戦争

第5節 教科書記述と政府とナショナル

第VII章 おわりに

II. 論文の概要

続いて本論文の概要を章順に従って述べていく。

第I章 はじめに

本章では本研究の研究課題と研究目的、研究対象について述べている。現在、社会のグローバル化に対応するために、世界の国や地域の理解が不可欠であり、国際理解、異文化理解教育、さらにはシチズンシップ教育を推進していくことが重要な課題になっている。学校教育では特に社会科科目がその中心的役割を果たすべきであり、その点で歴史教育と並んで地理教育が重要である。教科書はその国の小宇宙（マイクロ・コスモス）であるという言い方があるように、世界各国の教科書はそれぞれ個性的であり、別技（1997）は、海外の教科書に見られる一般的な特色として、それぞれの国情、民族性、歴史など、国による性格が強く現われていると述べている。そのため、教科書に関する研究は、その国の教育の特徴、その国の他国イメージなどを研究する良い手掛りとなる。

そうした教科書研究について考えた時、歴史教育に比べて地理教育における教科書研究の蓄積は乏しい。歴史教育では韓国の歴史教科書、中国の歴史教科書等、海外の教科書研究が様々な見地から進められているが、地理教科書に関してはわずかしかない。地理教科書は学習段階の早期から生徒が接する図書であり、生徒の世界観の形成に強い影響を与える。従って国際理解教育の面から地理教科書に関する研究は重要である。

本研究では、戦後から現在にかけての、中国と韓国の地理教科書における日本に関する記述の変遷とその特徴を探り、中国と韓国における日本のイメージ、記述の変遷に影響を与える要因を明らかにするとともに、同じく、戦後から現在にかけての日本の地理教科書から見た中国と台湾の記述を分析することにより、日中韓 3 か国の地理教科書の特徴を明らかにすることを目的とする。なお、研究の都合上、中国の地理教科書は中学校、韓国と日本の地理教科書は高校のものを対象にしている。

第Ⅱ章 日本・中国・韓国の教育制度と教科書制度

第Ⅱ章では、日中韓 3 か国の教育制度と教科書制度について説明している。日中韓 3 か国のカリキュラム・教育課程は、第二次世界大戦後の同時期に始められ、3 か国とも小中高 6-3-3 制を実施し、小中学校で 9 年制の義務教育が実施されている。教科書の編集においては、3 か国ともカリキュラム・教育課程に従わなければならないという共通点を持ち、日中 2 か国は検定制であり、韓国は国定制、検定制、認定制の併用である。教科書採択に関しては、日本では公立学校については所管の教育委員会、国立・私立学校については学校長に権限がある。中国では省が作成した教育用書籍目録に基づき、省の教科書選定・採択委員会に採択権限がある。韓国では、検定・認定教科書の採択は学校長に権限がある。教科書の有償無償に関しては、義務教育段階において日韓両国は無償である一方、中国は有償である。義務教育段階以外は日中韓 3 か国とも有償である。

第Ⅲ章 中国の中学校地理教科書における日本の扱い

第Ⅲ章から第Ⅴ章にかけては、個々の国の地理教科書を取り上げて分析が行われている。第Ⅲ章では中国の中学校地理教科書における日本の扱いについて、質的、量的両側面から分析している。分析の結果、中国の地理教科書における日本記述の変遷は、1949～1977 年国際情勢による政治的变化を語る時期、1978～2007 年改革開放と社会主義市場経済による経済的变化を語る時期、2008～2018 年日本への親近感の育成と日本経済への牽制を示した日中関係の変化を語る時期の 3 つに分けられた。

中国の地理教科書の記述は政治的影響を受けやすく、出版時期によって、反米と反ソに傾倒した記述が表れる。日本関連記述の中にも中ソと中米の力関係の変化が強く表れており、中国の反米時期には、日本はアメリカの従属変数としての扱いを受けた記述となり、1970 年代に入ってから反ソ時期には、反ソを前提とした北方領土問題における日本の立場への強い支持（親ソ時期には逆の内容だった）が記述されている。また、検討期間を通じて反日的記述は少なく、1970 年代までであった戦争を通じての日本批判も、資本主義の中核であるアメリカや日本の国家体制に対して批判するが、日本国民への批判はなかった。1990 年代に入ると、日本の記述内容は発達した経済発展に関するものや日本への親近感の育成に関するものへと変化した。

このように、中国の地理教科書の記述内容には強い政治性が見られ、出版当時の国家政策、国家間関係、社会・経済的ニーズなどと緊密な関係が存在する。言い換えれば、中国の教育は国の政策や立場の影響を受けやすく、政府が教育をコントロールする力が強いと

言える。

第IV章 韓国的高校地理教科書における日本の扱い

第IV章では韓国的高校地理教科書における日本の扱いについて、質的、量的両側面から分析している。分析の結果、量的変遷を示す地理教科書の日本に関する記述割合は、1960年代半ば以降現在に至るまで教科書全体の3~5%と、ほぼ一定の割合を占めており、2000年代半ばになると、その割合が少し上昇した。また、全期間を通して工業を中心とした経済関連の記述割合が非常に高い結果となった。

一方、質的特徴を見ると、分析時期を通じて次の3点の特徴が見られた。1つ目は、日本記述の内容は日本に対して批判的であることが基本だった。それは歴史に関する記述だけでなく、日本の産業や国民性の説明の際にも貫徹していた。2つ目は、日本に関する説明は、たとえそれが経済的内容であっても、歴史的背景、具体的には戦争に関する説明から書かれていた。つまり日本の経済成長は徹底的に戦争を利用したという説明である。3つ目は日本に対する文化的優越感の記述が多く見られた。これが日本記述の多くが経済、特に工業に関する記述を占めた最大の理由である。日本の文化は説明するに値しないという理解である。ただ、こうしたいずれの特徴も教科書の刊行時期によって強弱が見られた。

そして、こうした教科書記述内容の特徴の強弱を、これまで既存研究では十分な展開がされてこなかった韓国の社会的背景と結びつけて検討を行った結果、時代ごとの記述内容の変化、中でも特に日本に対する批判的要素の強弱が現れた時期は、教科書刊行当時の大統領の対日政策の影響と強く結びついているという仮説を提示するに至った。

第V章 日本の地理教科書から見た中国と台湾

第V章では、日本の高校地理教科書における中国と台湾に関する記述を、それぞれ量的変化と質的变化に分けて分析した。中国記述に関する分析の結果、日本の地理教科書は刊行時期によって編集方針（系統地理と地誌、必修と選択、単位数等）が大きく変化し、記述ページ数やページ割合といった量的変遷はそうした編集方針の影響が大きいのと思われる。具体的に見ていくと、中国に関する記述量は、同時期に出版された編集方針（系統地理と地誌、単位数）の異なる教科書を合わせた記述割合の平均値を求めると、1973~2018年に出版された地理教科書における中国の記述割合は、教科書全体の3~4%を占め、記述割合は安定していた。

次に中国記述の質的变化について見ると、1960~90年代初期では資本主義と社会主義を分け、ある程度政治的なものを意識した記述内容であった。しかしその後、2000年代初期までは生活と文化が語られるようになり、2000年代初期から2018年にかけては、貿易を含む日中連携と中国の経済発展について記述されている。つまり中国関連記述に見られる日本の地理教科書の最も大きな質的特徴は、記述内容に感情的要素が含まれておらず、冷静で客観的であることであった。

最後に、台湾に関する日本の地理教科書の記述を見ると、分析時期を通じて記述量が少ないことが特徴であり、量的変化の時期的特徴は明らかにならなかった。一方、質的变化

の特徴としては、1973年以前は国交があったため1つの国として扱われていたが、1973年から2000年代前半までは中国との国交回復に伴う「一つの中国」の立場への尊重から、台湾は中国の諸地域の一つとして書かれていく。しかし、2000年代後半になると、大枠としては中国の記述の中に書かれていながらも、「華人と華僑」の枠組みの中で記述されるようになった。「華人と華僑」はどちらも基本的に中国から海外に渡った人達を指す言葉である。その点からすれば、日本の地理教科書の記述において、台湾を中国とは別の「国」として認識する理解が強くなりつつあると思われる。これは21世紀に入ってから見られるようになった日本政府、日本社会の認識と軌を一にするものである。

第VI章 中韓両国の日本に関する記述の比較分析と日本の教科書の中の中国

第VI章では、第III章と第IV章で分析した中韓両国の地理教科書における日本に関する記述の特徴から、日本の記述に書かれている「戦争」と「批判対象」、「文化的優越感の有無」の3点の特徴を取り出し、その記述の中韓の差を比較するとともに、既存研究で指摘される中国と韓国の歴史教科書における日本記述の特徴も比較することにより、中韓両国の社会科科目における日本記述の比較を行っている。

まず1点目の「戦争」に関しては、中国の社会科科目のいずれも、戦争に関する記述があるが、地理教科書では1970年代半ばに記述が消えている。歴史教科書は1949年から現在まで記述が存在する。一方、韓国の社会科科目における戦争に関する記述は、地理教科書、歴史教科書とも戦後から現在まで存在する。韓国の地理教科書では、1980年代から90年代にかけて批判的記述が大きく減少することもあったが、1990年代後半から批判は盛り返している。

2点目は、中韓両国の記述において日本批判の記述はあるものの、2国間で批判対象が異なっていることである。中国の地理、歴史教科書における日本記述の中で戦争を通じて批判しているのは、少なくとも2000年代以前は日本の帝国主義と資本主義に対してであり、その一方で、日本の人民を含む日中両国の人民が被害者に位置付けられている。そもそも地理教科書では1970年代半ばに戦争記述が消えている。一方、韓国の地理、歴史教科書では、批判対象は日本全てであり、日本政府も日本国民も含めた「反日」記述が特徴である。1番目の特徴で地理教科書において1980年代から90年代にかけて批判的記述が大きく減少したことを述べたが、1990年代半ば以降現在にかけて、「反日」批判はより強くなっている。

3点目は、記述における文化的優越感の有無である。中国の地理、歴史教科書では、全体として中国から伝わっていった文化は日本の特有な文化に発展したと書かれており、必ずしもその記述内容に文化的優越感は見られない。ただ、歴史教科書は、古代からの日本固有の文化の発展やその特徴にほとんど触れておらず、日本出自の固有文化は学習する必要性がないという認識である可能性も否定できない。これも文化的優越感の一種かもしれない。一方、韓国の地理、歴史教科書の記述は日本への文化的優越感が強く、日本文化を否定している傾向さえ見られる。

続いて分析した、日本の高校教科書に見られる日中戦争記述に関する分析では以下のこ

とを明らかにしている。まず地理教科書では、中国、台湾の過去を記述する際に、日本を含め先進資本主義国の侵略を受けたことが書かれていたが、1990年代後半から現在にかけての教科書には戦争記述のないものが増えている。一方、日本史教科書における中国近現代史の記述では、戦争記述はあるものの、記述方法は客観的でかつ平板であり、戦争の侵略性および悲惨なイメージを曖昧にしている印象を受けると述べている論者もいる。

最後に第5節「教科書記述と政府とナショナル」において、本章の取りまとめをしている。そこで書かれているのは、戦争記述における加害者としての日本の立場、被害者としての中国、韓国の思いが教科書の記述内容に表れているとする解釈を中心とする。それに加えて、中国の教科書には「革命史観」が見られ、具体的な視点で言えば、自国政府の政治的意図、中国の大国意識が教科書の内容に強い影響を与えていることである。韓国の教科書には、日本記述において鮮明に見える日本に対する文化的優越感の存在、さらには日韓合併という歴史から由来する「反日」と、現在に至るまで大統領によって繰り返し使われてきた政治的カードとしての「反日」、これら2つの「反日」の存在が、教科書の記述内容に強く表現されていることが明らかにされた。そしてこうした「反日」記述の強弱はこれまでの大統領の対日政策の内容に強い影響を受けているという本研究での仮説の説得力を改めて裏付けている。

一方、日本の教科書における戦争記述の推移を見ると、時間の経過とともに「侵略」が「進出」に変わったり、さらには前章で述べた台湾をめぐる記述の扱いの変化等について検討すると、客観的な記述を特徴とする日本の教科書においても、その時の日本政府の立場が検定制度を通じて記述内容に入り込んでいることが明らかになってくる。

こうしたことから見ると、日中韓の教科書は、その強弱はあるものの政府の意図が反映されていることは確かである。それらを考慮した上で日中韓の記述の特徴を見ると、日本の教科書はある程度「客観的」記述に終始し、良し悪しの評価がなく、「禁欲的」であり、感情的表現がないのに対し、中国と韓国の教科書はそれぞれ大国意識、民族主義と愛国主義といったナショナルな観点からの評価を明確にしている点に大きな差が存在する。

第Ⅶ章 おわりに

第Ⅶ章「おわり」では、本研究で明らかになった内容が簡単にまとめられ、問題点やこれからの課題が提出されている。本研究の分析を通じて、日本という同一対象国に対して、国によってはその記述内容が異なり、見てきたように、それぞれ個性的であることが明らかになった。韓国の教科書には「反日」記述が多いのに対して、中国の教科書には「反日」記述が少ないことを比較検証し、一時期マスコミ等で語られた中国における反日的内容に満ちた教科書の影響は、少なくとも本研究で対象にした地理教科書を見る限り限定的であり、歴史教科書も関連研究の検討から、地理教科書と同じく限定的であることが予想されると述べている。

本研究を通じて、教科書に関する研究は、国民相互の相手国理解の形成メカニズム解明に寄与するだけでなく、各国の教育の特徴と、教育と政治・経済などの関連性を明らかに

することができる」と筆者は考えている。そして今後の研究では教科書記述だけではなく、教育と国家政策、教育と国益、教育と文化などの関連性を視野に入れ、より幅広い範囲で研究を進める必要があり、これが今後の課題としている。

Ⅲ. 総合的評価

上述した概要を踏まえ、本論文の評価すべき点と課題を指摘する。本論文においてまず評価すべき点は、これまで海外の地理教科書について、これほどまで丁寧に内容を分析し、その特徴を明らかにした研究は存在しないことである。韓国の地理教科書、中国の地理教科書において、日本がどのように記述されているかという点については、日本の地理学界において関心の高い研究領域であった。ただ、地理学においてこれまでほとんど研究がされてこなかったのは、当該分野の関心の焦点が、やはり東アジア諸国を中心にした歴史認識問題を中心とする歴史学の研究領域であったからだと思われる。地理学からこうした教科書の記述内容や教育内容に関心を向け、実際に研究を行っていくのは、「関心はあるものの、その成果に不安が残る」、つまり研究をしても、それに見合うだけの成果を獲得できるかについての不安が大きかった。南氏はそうした不安を、自らの有する言語能力（中国語、韓国語、日本語）を武器に、テーマを探り、丁寧に分析作業を行っていった。

次に研究対象国を東アジア諸国全体に設定し、国際比較を可能にした点についても、適切に評価すべきであろう。当該分野の研究において、単一国を対象にするだけでもかなりの努力と研鑽が必要であるが、南氏は中国と韓国、日本、さらには台湾を含めた東アジア全体に研究対象を設定することにより、狭い地理学分野における関心の獲得だけでなく、歴史学等隣接分野の研究領域との問題意識の共有化、さらには一般社会の関心領域へ自らの研究テーマを関わせることに成功していると言えよう。そして、当該研究テーマは、本論文で分析を行った中国、韓国の地理教科書における日本記述の特徴、日本の地理教科書における中国、台湾記述の特徴の指摘にとどまることなく、今後も相対する国の地理教科書間の記述内容の分析、さらには本論文でも一部開始している歴史学の研究蓄積との比較検討等が可能である。本論文はそうした一回り大きな研究領域の中核にあたる国家間の地理教科書の比較分析を取りまとめたものと位置づけることができる。

次に本論文の具体的な研究成果に関する評価に移ろう。本研究は研究成果においても相当量の収穫を得ている。まず、中国、韓国の地理教科書における日本記述の特徴を見事に明らかにした。中国の地理教科書が政治的影響を強く受けている点、日本で一般に思われているほど「反日」的記述ではない点、逆に近年では親近感を強めた内容になっている点、日本の経済発展に強い関心を持っている点などは、本論文によってはじめて客観的分析から明らかにされた事実である。一方、韓国の地理教科書に一貫して見られた「反日」的記述、戦争と関連させた説明、文化的優越感、経済、特に工業に関する記述の多さなどの特徴の提示、またこれらの一種感情的な説明の強弱が教科書刊行当時の大統領の対日政策の

影響と強く結びついているという仮説の提示などは、やはり丹念な実証分析だからこそ明らかにすることのできた成果である。

次に日本の地理教科書に見られる特徴としての記述の客観性、平板さなどにおいても、戦争における侵略から進出への言葉の書き換えや、台湾の教科書内での位置づけの微妙な変化を明らかにすることによって、やはり政治的な影響から免れることができていないことを説明している。

そして、こうした本論文によって具体的に明らかにされた各国の地理教科書の記述内容の特徴は、国際比較が可能だからこそより明確化されているのであり、これこそが本研究成果の特筆すべき点である。これら諸成果は今後の地理教科書研究、地理教育研究にとって決して無視することのできない基礎的成果になっていると言えよう。

さて、このように評価すべき多くの点を有する本論文であるが、課題も存在する。ここでは2点指摘させていただく。第1点は、本論文の説明・分析スタイルに必然的に伴う厳密性の不足である。既述した通り、本論文の説明・分析は、対象とする地理教科書から、対象国の記述量を数え、キーとなる言葉を選び出し、説明内容を整理し、社会的現象と関連させることによって成り立っている。本論文は地理教育分野の研究と言ってよいものであるが、具体的内容は社会、経済、政治現象との関連を強く意識した社会地理学的要素を含んだものである。こうしたタイプの研究において、キーとなる言葉の選出を間違えたり、説明内容の整理に失敗したり、社会現象との関連付けを間違えたりするリスクはなくなる。また、それらを相当の確率で適切にこなしたとしても、立場の違いなどから、厳密に説明された研究成果として評価されない場合もある。本論文もこうした問題から決して逃れられてはおらず、さらなる説明力の向上が望まれる。

2番目の課題は、特に第VI章に関わる点である。それまでの章における分析と異なり、第VI章は、特に第III章から第V章において明らかにされた日中韓3か国の地理教科書の記述の特徴を、さらに中韓2か国の比較、歴史教科書研究の成果との照合、日本の地理教科書の特徴と歴史教科書の記述内容の比較を行うことにより、本論文の成果をより充実させる努力を行っている。

しかし、この試みは第III章から第V章における実証分析の深さとそれによって得られた成果に比べて、必ずしも充実した成果になっていない。最大の理由は、南氏も歴史教科書に関わる研究の理解はできていると思われるが、歴史教科書そのものにあたっての事実確認が行われていないため、十分な説得力が得られていないからだと思われる。それまでの研究成果の比較分析を超えた新たな試みとしては評価するが、今一度十分な分析を行う必要があると考える。

以上、本論文には大変評価すべき点が多い。と同時に上述したように、課題として指摘すべき点も存在する。こうした指摘を適切に受け止め、今後の研究に活かしてもらえることを切に希望する。

IV. 結論

審査小委員会は、南春英氏提出の論文『日中韓の地理教科書における記述から見られる教育の特徴』を上記のように評価し、南氏が博士（学術）の学位に授与される資格を有するものとの結論に達した。